
小悪魔スマイル

インコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小悪魔スマイル

【Nコード】

N8472L

【作者名】

インコ

【あらすじ】

人間は変わるものだ。

成長し、恋愛をするものだ。

それを僕は、彼女と出会い過ごした、

あの1年間で痛感することになる。

愛と似て非なるもので、決して永遠とは呼べるものではなく一瞬の儚いもの。

一時的な感情の迷い。

それを恋だと僕は認識し、今までもそうやっていくつもものの気の迷いを自らの胸の中で押し潰してきた。

そもそも、周りの友人の話を聞いていると、何故、人間は恋愛をここまで重視して生きているのか不思議に思っただけで仕方が無かった。心の痛くなるモノなら触れなければいい、切なくなるような物語になるとわかっているのなら、始めからその始めの1ページを開かなければ良い。

僕は、普通の人間からしてみれば（なにが普通なのか、それすら僕はわからない）相当冷めた人間だった。

そんな冷めた人間にも、どうやら『モテ期』と、いうものはあるらしかった。中学の頃からバスケット部に所属していた僕は、高校時、身長は171センチと、決して高かったわけではなかったものの、一応ポイントガードとしては周りの足を引っ張らない程度の実力は実につけていた。レギュラーにも入れてもらい、その後、バスケット部のマネージャーと女子バスケット部の後輩に告白されるといふ、人生上の転機ともいえる時期が僕にも到来していた。結局の所、告白という勇氣ある行動をしてきた女性達に対して、僕は心無い言葉で追い払ってしまった。（後に、僕のある事ない事が噂でクラス中に流れており、女というものの、恐さを知る事になった。）

それからというものの、僕にはそのような転機が再び到来する事無く無難に勉強をし、無難な大学を受験し、これまた無難に受かる事になる。

このまま淡々と人生は終わっていくものなんだ。

僕は、この世に生きる楽しみを、既に諦めつつあった。

失うものなど何も無い。もはや、これから無くなる物といえば『髪』くらいなものだ。

ジョークなのになにもジョークに聞こえない台詞を頭に思い描いては一人で含み笑い。女縁の無い極めて気色の悪い男に僕は育てしまっていた。

しかし、人間は変わるものだ。成長し、恋愛をするものだ。

それを僕は、彼女と出会い過ごした、あの1年間で痛感することになる。

ところで、今の僕といえば、その彼女と5年振りの再会の為、初夏の蒸し暑い中、急ぎ足で駅のホームまで向かっている。

昨日雨が降っていたからか、いつもよりも空気は水気を帯びていて、所々には水溜りの後のような黒いポツポツが残っている。

…脇の下が、これでもかと言うくらいビショビショになって気持ちが悪い。

所々で蝉が応援のエールを送ってくれている中、僕は熱気でモウロウとした頭の中で今から会う彼女の行動パターンを予想していた。

彼女は恐らく、15分前にはいつも待ち合わせていた喫茶店に着いているだろう。

当時から彼女が好きだったメロンソーダでも飲んでいるのだろうか。そして腕時計と、ギリギリに着いた僕を交互に見つつ、僕に向かってこう言うんだろう。

「分からないかなあ…？」

僕の人生を変えた、あの知的でありながらも可愛らしい『子悪魔スマイル』をしながら。

君に会い、

僕は確かに恋をして、
そして愛を知った。

神奈川西部にある、何の魅力も感じられない、背景が山、近くには海というアウトドアが好きな人にはうってつけのような大学へ、僕は一般受験によって入った。

この場所に来る前に、やたら母が僕の私生活を心配していたのを強く覚えている。

「あんたを一人暮らしにさせたら干からびたカエルみたいになっちゃういそうやねー」

いちいち例えがおかしい母と、それに便乗するかの如く馬鹿笑いをする父。

別に家族が嫌いなわけじゃない。僕の地元が嫌いなわけでもない。ただ、ふと思ったただけだった。

（新しい場所に行きたい。）

そう僕の心が急に訴えてきた気がして、受験する大学を全て違う県にしてみたのだ。結果的に神奈川の大学に無事に受かった僕は、未知の生活を目の前に多少の期待をよせつつも神奈川の大学へと旅立った。

これが、去年の春。

そして今年の春。

神の勘に触るような事を何かしただろうか？ いや、触らぬ神に祟り無しを、モットーにしている僕に限ってこんな事はありえない。（モットーにするほどではないが。）

花見でもして酔っ払ったのだろうか：

神は、僕の人生に、唾をひっつけたのだ。

学生課 通知報告書

【留年 20048364 星野真也】

…重い。

重すぎて、僕はこの手紙をひたすら、アパートのポストの前で手を小刻みに震わせ唖然と見ていた。

たしかに、大学へ真面目に行っていたか、と聞かれたら、答えはノーだけれども。留年になってしまっ程、単位を落としてしまっていたとは想像してもみなかった。いや、想像はしていた。ただ単純に見て見ぬフリをしてきた。

度々積んでいった塵が、山となって目の前に現れたというだけなのに、どうしてこうも泣きたくなるんだろう。

この留年によって人生の1年が無駄になるという事に関しては、僕にとっては全く問題では無い。

問題なのは実家の家族になんて言えばいいのかなのだ。それが分からなくて、僕は未だにポストの前から動けなくなってしまっている。

ポストの上には、ミカンが口をアングリ開けて、暇そうにアクビをしている。

初めて会った時ミカンを転がして歩いていた野良猫。だから『ミカン』。

出来る事なら今すぐにでもお前と人生を交換したい。そして、一生ミカンを転がしてこのアパートの周りに住みたい。

そんな現実逃避をポストの前でしていると、大家さんであるノダさんが、階段からリズム良く降りてきた。

「あら真くん。さっきからなんでそんな所に立ってるん？」

「いえ…ちょっと大事な手紙を読んだんで」

「んま。やっと女っ気を漂わせてきたね！いい？女は押して押すのよ！」

野田さんは良い人だが、たまに…いや、かなりお節介な所がある。

「いや…そうゆうのじゃないんですよ。まだ女性からの手紙の方が救われます。」

「あら。真くんは…そっち系の人にアタックされてるの！？知らなかったわ…」

前言撤回。この人お節介とかじゃあなく…ただの面倒くさい人だ。

「いえいえ…まあ、今度詳しくお話しますので、変な噂作らないでくださいよ？」

「んふふ、最近面白い事探しに夢中になっててねえ。真くんもなんか、楽しい事あったらアタシに教えてね！」

そう言つとノダさんは回覧板を片手に隣の家へとスキップで去つていった。あ。面白い事がもう起きましたよ。ノダさん。あなた、スキップが凄手下手ですよ。

それにしても、なんでああゆう中年の女性はすぐ野次馬思考になるのだろうか。いや、ノダさんをそこいらのオバサマ達と比べてはいけないだろう。

ノダさんは好奇心の塊みたいな人なんだ。

聞いた話によると、ノダさんは、僕がこのアパートに引っ越してくる前に、みんなの私生活が気になりすぎて、アパートの人達が留守にする時間を一週間観察、把握して、ある日全ての部屋に監視カメラをつけるといふ、大事件をしでかしたらしい。（それを聞いた夜、僕は3時間かけて監視カメラがないか部屋をチェックした。）

まあ今はノダさんの事で無駄に考え事をしている暇はない。奇人ノダによりも鬼人母の事を考えねば。

…よし。とりあえず、あと1時間後に電話をしよう。そしてこの心の重みを吹き飛ばしてやる。

1時間後。ヒゲラシの声をBGMに、戦闘開始。

「あ。もしもし、真也だけど…」

「あー真ちゃん？あんた最近ロクに連絡もしないで何やってん！心配じゃないの！先月送ってあげた素麺ちゃんと食べてる？あれなかなかイケるわよ！やっぱり夏は素麺つてのが日本の文化よね！…あ。そうそうアンタ…」

「あの…母さん…俺さ、その…りゅ…」

「あ！」

「りゅ…ん？」

「あ！そっぴや留年したらしいじゃないの！アンタ駄目よーちゃんと大学は行かなきゃ！まだアンタの仕事は学ぶ事なんだからね！まあそんな気にする事でもないから今年こそちゃんと進級しなさいよ！あ。あと近々家帰ってきなさいね！いい！？じゃあお母さん トウモロコシ食べてる所だったからまたね！」

「あ。うん。…ホントに…。ありがとう」

「いきなりかしこまって気持ち悪いわね。らしくもないじゃない！じゃあね！」

ガチャン。あっけなく戦闘終了。

……………。

何歳になっても母親には勝てないもんだ。

言いづらいのがわかってたから、あんなに元気にガヤガヤ言ってくれたんだ。

我が子の考えてる事は母親には分かる。と、良く言うが、それは本当かも知れない。へその緒は切られても、繋がっているのは血だけじゃないんだ。

本当は僕以上に母さんは気にしてるんだろうな…またまたシヨツク。

よし。この1年を大学生活で1番意味のある1年にしようと思う。

母さん。1年間だけ、親孝行延期をお願いします。

少し蒸し暑い。しかし、夏一番とも言える、少し強めの風。優しい、草の匂いを乗せた風が、ベランダから颯爽と流れこんできた。

しかしまた、留年ってものは泥沼みたいなものなのかも知れない。

今まで幾つか友達頼りだった講義も、今年は一人でレジェメを完成させなければいけない。

周りがみんな、一つ年下というだけでこうも居づらいものなのか…

決意を固め、真面目に大学に通い始めていた僕だったが、早くもこの疎外感と寂しさに心が折れ始めていた。なんて弱き心か。

昼になり、食堂で友達と合流できた時のこの感じ、大切なものは離れてやっと分かると言うけれど、まさにこの感じ。アウェイなこの感じ。

始めこそ、この自業自得ともいえる大学生活に苦しんでいたものの、流石は人間、順応してくるものだ。一人で居る事に慣れてくると、さほど苦しくもなくなってきた。講義が終わり昼になった途端、友達に電話をして合流する事もあまりしなくなったし、外のベンチで一人サンドイッチを食べるのも、大分、様になってきた。（友達がいなそうな顔と言うわけではないのであしからず。）

一方私生活では、1年続けていたコンビニを最近辞め、新しく居酒屋のバイトを始めていた。別にコンビニが嫌になったわけでもないのだが、空気の入れ替えみたいなものを私生活でもしておきたかった。

働き出した居酒屋は個人店で、オーナーが一人で10年営んでいる店だ。

面接の時の話だが、店長は一通り僕の履歴書に目を通すと、そ

れはもう完璧な35歳スマイルで

「俺の事はマスターって呼んでな」

と言い寄ってきた。本当はバーテンでもやりたかったのだろうか。しかしあまりにもその人は店長というよりはマスターっぽい顔立ちをしていたので僕は何も突っ込みを入れなかった。

「冗談でいっただけなのに。」

と、後にマスターにカミングアウトされた。冗談って…顔だけにしてみたい。

マスターは年に4、5回店を2日間閉めては、ソフトサバイバルに連れて行ってくれるらしい。あからさまにそれは、なんのヘンテツもない『キャンプ』。なのだが、オーナー曰く言い方を変えれば心の持ち様が変わるらしい。

極度のアウトドア狂じゃない僕にとつては、山にこもる時点でそれがキャンプなのかソフトサバイバルかなんてなんも重要ではない。重要なのは、テントを虫一匹も侵入させないよう完璧に仕上げる事だ。起きて頭上にカマドウマなんていた日は、もう二度と山になんか行かないだろう。なんで触覚の長い生物はこうも拒否反応がでるのだろう。心理学者よ、教えてくれ。

まあマスターとの初ソフトサバ（略していいよねマスター。）は基本的に飯は美味しいし、テントの張る場所もベストチョイスなので毎回かなり快適に山中ライフを過ごせた。マスターが寝返りを打ってテントの入り口を破り、その瞬間大量の蚊に襲われたあの一瞬を除いて。

マスターとのソフトサバに行つて、その丁度一週間後くらいから関東にも梅雨前線が到来した。今年の梅雨は、どうも気が乗らないらしいのか、あまり雨は降らないらしい。

天気予報は所詮予報だからな。天気予報士の勘って奴がどのくらいなものか見せてもらおうじゃあないか。

梅雨といえば…雨が多くなるこの時期、野良であるミカンは大丈夫だろうか。心配になってアパートの裏のミカンがよく居る空き地に顔を出してみた。

するとどうだろうか、誰が不法投棄したのか知らないが、なんとミカンは犬のプレハブ小屋のような物の中に、草を敷き詰めてクッションのようにし、優雅に毛づくろいをしているではないか。

こいつ、いちいち賢いところが人間みたいだな。

ミカンは恐らく前世は人間だったと思う。それもかなり世渡り上手な。ミカンは嘲笑うかの如くゴロゴロと喉を鳴らしている。

「ニヤーン」

いちいち可愛いところがまた憎たらしい。

「梅雨の時期は心をしっかり持ちなさいよ！この時期に自殺者は一番多いんだから！ね！良い事あるって！」

（うおっ！）

ノダさんは相変わらず神出鬼没だ。いつの間にか僕の後ろにドツシリと立っていた。片手に近くにあるスーパーの袋を2袋。もう片方には何処で買ったのか、ド派手なオレンジの傘。

「そんなに今の僕、死にそんな雰囲気出してました？」

「ええ！そりゃあもう！今から富士の樹海に行きますが何か？つて面よ！」

「…。なんかそれ失礼じゃないですか…？」

「やあね。顔の事なんか言っていないわよ！」

「そうですか…」

「あら、こんな所にいたの？タマ。最近名前付けてあげたのよ。ほら、タマ！出てきなさい！タマ！」

ミカンはゆつくりノダさんに背を向けた。グッジョブ。ミカン。

「…。じゃあ僕部屋帰りますね」

「真くん！真くん！」

「はい？」

「ファイト！」

とりあえず、変に励まさないでもらいたい。

そして、傘の色を少しは考えてもらいたい。

そんなこんなでノダさんを上手くスルーしてる間に、梅雨前線も軽やかに僕らの住む町をスルーしていった。流石に大学もスルーするわけにいかず、雨で曲がる前髪を気にしながらも、淡々と授業には出席しに行った。

大学の校内に紫陽花は力強く咲いていて、今年の紫陽花は何だか一段と綺麗で、それでいてとても華やかに見えた。

「去年のこの時期は、紫陽花なんて見る余裕さえ無かったな…。」
去年と比べ、心に余裕のある自分に気付き、少しだけでも嬉しかった。

梅雨が明けてから、僕はバイトの無い日は、よく近くの図書館へ足を運び、様々なジャンルの本を読んでいた。

土の中からいち早く出てきたのを、少し悪く思っているように感じる蝉の声、微かにクーラーの動く音、誰かの本をめくる音、それらをBGMにしながら窓際でゆっくり読書に更ける。多分これは、僕のナイスシチュエーションベスト10に入る程の、良い環境だ。こうやって、図書館独自の静寂の中小説を読むと、一層主人公に感情移入できるのだ。

そういえば、最近では携帯小説が若い世代の間で流行っているらしい。このまま技術が進んでいったならば、いつかの未来ではバーチャル小説みたいなものも出てくるんだろうな。実際に本を開くとその本を開いた人の頭の中で、まるで夢のように、しかし鮮明に小説の中のストーリーが進んでいくという感じの。まあ小説がそんな時代になってる未来。どんな世界なのか想像もできない。人間は少しは利口になっているのだろうか。

…なんて。僕が未来について辛気臭いような事をこんな考えた

って仕方が無い。

未来か。5年後どころか、来年の自分さえ想像の出来ないこんな自分が、なんとも不甲斐無く感じる。

無駄な考え事を挟みながら、最近読み始めた小説を20ページ程読み、そろそろ帰ろうかと思っていた所で、外では夕立が降り始めてきた。

そういえば、僕はやたら夕立という自然現象に遭遇する。毎年とっていい位、夕立によって、体をびしょ濡れにされているのではないのだろうか。

しかし、夕立君よ。僕は雨が好きでね。濡れるのも大好きなんだよ。悪意を持って降らしているのならご苦労な事だ。ネット用語で言う、『乙』。

そうゆうわけで、夕立なんぞに足止めされるわけにもいかないと思った僕は、この夕立の中、雨に濡れながら帰る事を選んだ。

空はいつもよりも赤みを帯びたオレンジ色をしていて、それでいて少し胸がムズムズするような雰囲気を感じ出していた。

案の定、僕は濡れになったの帰宅となった。少し急いで帰っていたせいで途中の階段で足を滑らせるわ、こうゆう日に限って道路が混んでいて横断歩道で待たされるわ、腕時計も壊れるわ。一時の青春にしては、随分な代償だったと思う。

玄関で服を全て脱ぎ、洗濯機へ放り込んだ。そして、そのまま風呂場にいきシャワーを浴びる事にした。雨に打たれ、少し冷えた体にかかるシャワーと言うのは、本当に格別だとつくづく思う。それは、風呂上りに飲むビールのような、食後の煙草のような、そういうレベルの幸福感だ。

シャワーを浴び終え、リビングで髪を乾かしていると、帰り道に見かけた少し不思議な女性の事を思い出した。

丁度、家と図書館の真ん中位には、公共の公園がある。さほど広くもないが、滑り台やジャングルジムもあるなかなか立派な公園だ。

その前を通った時、公園を横目でチラリと見てみると、滑り台のてっぺんに女性が立ち、呆然と空を見上げていた。呆然と、コンクリート道の真ん中、ただ一つ蒲公英が咲いているかのように、静かに、力強く、彼女の姿はあった。

始めは不気味に思えて、見なかった事にしようと目線を元に戻そうとしたが、何故だか僕は、その女性から目を離せられないでいた。

薄いピンクのキャミソールに、真っ白でふんわりとした感じのロングスカート、セミロングのミルクティー色をした髪、顔は横顔だったからよくわからなかったけれど、少し高めの鼻という事は分かった。

公園という空間にどこからかコピーペーストされたように浮いている彼女。しかしその彼女の雰囲気は、先程まで降っていた夕立

の雰囲気と似ていた。

一目惚れしたわけでは無いが、あんな人がなぜこの夕立の中、公園で、しかも滑り台の上に立って空を眺めていたんだろう。僕はあの女性のしていた不可解な行動を知りたくて仕方が無かった。「もう一度会えたら……」そんな事まで考えていた所で、なんだか自分がストーリーカーのように思えてきてしまい、一気に我にかえる。

その後の事といえば、鞆を窓際に乾し、軽く夕飯がてらカップ焼きそばを食べ、特に意味もないが早めに寝る事にした。

その3日後、神様は僕の興味心を考慮してくれたのか、彼女と再び出会うチャンスくれた。図書館という避暑地で、昼間の猛暑を回避し、夕方頃いつもの帰り道コースで帰宅をしていると、あの公園にはあの夕立の日見かけた彼女の姿があった。それもまた、滑り台の上に立っていた。昔から、自分から話しかけるのが得意では無い僕だったが、彼女には不思議なくらいスムーズに話しかける事ができた。

「空…好きなの？」

「…」

彼女は僕の言葉など始めから聞こえていないかのように、ただ呆然と夕空を眺めていた。

（初対面でいきなり図々しかったかな…）

「あ…この前夕立があつたでしょ？その日も君、そうやって空を見ていたからさ…ちよつと気になって…」

「…。あなた…。この前、私の事ずっと見てたよね？」

ゆつくりと視線を僕に移して、彼女はそう言った。

「え…こつち見た感じなかったのに良く分かったね。」

「そりゃああれだけ凝視されれば、誰だつて気がつくよ。」

（いや…草食動物みたいな目の付き方してなきゃ分からない場所にいたんだがね。）

「こんな場所で立ち話つても難ね。」

そう言う彼女はスルツと滑り台を滑って、ブランコの方へと足を進めた。彼女の近くにきて分かったのだが、彼女はかなり背が高めだった。僕より少し背が低い位なので…168くらいだろうか。

「…ん？どうしたの？そんな拳動不審な顔して。」

（…失敬な）

「いや。なんでもないんだ。」

彼女の隣のブランコの腰掛け、さっきの話の続きを切り出した。

「それで、君は何ですつと空を見ていたの？」

「この場所から見る空が好きなの。家の窓から見る空と、旅先で見る空は違うものでしょ？」

「まあ…そうだね。それで…なんでこの公園なんだい？」

「小さい頃ここで遊んだの。昔いた場所には、昔置いてきた思い出もそこに一緒にあるでしょ？それを心に感じながら見る空のなんて美しい事か…つてね。」

目をうつとりさせながら彼女は淡々と場所の魅力を語り始めていた。…今まで、ここまで変わった女性と出会った事があるだろうか。いや、変わっているというよりもかなり独特な価値観みたいなもの。それが彼女からは感じられた。

「あなたは空が好きなの？」

「僕はそこまでロマンチストでもないし、センチメンタルになる事もないんであまり良く見るって事はないかな。ただ…空は魅力的だと思うよ。決して途切れる事のない、唯一無二のモノつてね。」

「今、恐ろしくロマンチックな発言をしたの自分でわかった？」

「質問が既にロマンチックだったからだよ。」

「自覚はないっ。」

「同じく。僕もだっ。」

こうやって人と、ましてや異性と話すなんていつぶりだろうか。自然に流れるような会話が、こんなに楽しいなんて今まで思った事もなかった。

どれくらい話しただろうか。空は蒼色に染まり、ヒグラシが疲れたように小さく鳴いていた。空では月が、今からは自分の時間だと言わんばかりにテカテカと光を放ち始めていた。

「明日も図書館にいるの？」

「うん。あそこは僕の第二の家だからね。」

「ふふ。インドアな人なんだね。」

「別に否定はしないさ。」

「あたしも多分図書館に行くと思う。図書館では私語はつつしむように……?」

「偶然会ったらちよつと外でお茶でもする?」

「あら、私固い女だよ?」

「んぐっ……そんなつもりで言ったわけじゃ。」

「んぐ!だって。ふふ。ジョーク。じゃあ……またね。」

彼女はそう言う勢いよくブランコから飛び降りて図書館の方へ早足に帰っていった。初対面であの女性と、こんなに話すなんて思いもしなかった。時計の短針が8を指している事に気付く。そしてあまりに予想していた時刻と違っていたため、一人で呆氣にとられていた。

帰り道、何故だか僕は身震いのようなものを感じていた。退屈な日々になにかとてつもなく刺激的なものが入ってきたような、乾いていたサラサラの心に夕立のような雨が降ってきたような、そんなもどかしく、達成感のようなものに包まれていた。

涼香。それが彼女の名前だ。

まだ僕は彼女の名前しか知らないが、今はそれで十分だった。人生生きてくうちに何度か見かけるであろう、人生の転機スイッチを、僕は見つける事が出来たのだ。少なからず涼香は、僕の人生を変えていくのではないのだろうか。直感だがそんな気がして止まなかった。それはつまり、恋愛感情を彼女に抱いたという事か。と、言われても今の段階では何とも言えない。ただ、彼女が僕の人生においてのキーポイントである事は確かなのだと思った。

彼女と出会った次の日、僕は何となくいつもより少し早く起き、そして何となく少し散歩をしてから図書館に向かおうと思っていた。ドアを開けた途端、蝉の大合唱と、日光のキラキラとした光が、僕を迎えてくれる。夏がもう本番だという合図だ。サビで少し赤茶色に変色した階段を降りると、いきなり目に入ってきたのはノダさんだ。水色の長いホースを使い、アパート脇の向日葵に向かって、勢い良く水をぶちまけている。麦藁帽子にド派手なアロハ柄のワンピース。ここまでくると、ド派手アイテムがしっくりきているようにも思えてくるものだ。

ノダさんは、僕の存在に気付くやいなや、ホースをこれでもかといわんばかりに振り回し、振り返ってきた。

「あらっ。真ちゃん！今日は早起さんじゃないの！」

「あ…はい。図書館に行く前に少し散歩しようかと。」

「ん！そうよね！たまには、朝から体にお日様当てないと…ホント…モヤシみたいにな　っちゃうものねえ！」

モヤシとは僕の事だろうか…まあ確かに季節相応の肌色はしていないけども。それは置いといて…水が。僕の足元にかかっていた。

「あららら！ごめんなさいね！」

気付いてくれたのか、ノダさんはまたまたホースを振り回して、既

にビシヨビシヨの向日葵に更にかけ始めた。ミカンは最近全く見ていない。小さな旅にでも出ているんだろうか。それともフィアンセ探しか。向日葵に水をやり終え、次の標的を前の道の乾いたコンクリートへと変えたノダさんをよそ目に、僕はのんびりと散歩へと向かった。

それにしても、夏つてのは本当に気持ちの良い雰囲気を出してくれている。ある家からは風鈴の音が奏でられている。ある家の前では子供達が簡易式プールで水をかけあっている。どこを見てもそこは、淡い白を帯びた夏の風景画のようだった。なによりもここら辺は東京の渋谷などとは違い、そこら中に山々がある。時々、そこから吹き降りてくるクーラーのように冷たい風が、なによりも僕は好きだった。こんな田舎だからこそ持っている特権。と、いう感じだろうか。この風に加え、もう少しこのジメジメ感が無ければ言う事なしなのに。と、つくづく思う。

僕の実家は東北だったので夏でもカラッとした空気を漂わせていた。夏の空気について脳内議論を繰り広げながらも、夏の雰囲気十分に満喫した僕は、そこから10分もかからない、涼香と出会うであろう図書館へと、多少の期待を持ちながら足を進ませた。

相変わらずの涼しい雰囲気の中、一番奥の窓際に涼香は居た。オフホワイトのワンピースに水色の薄いカーディガン。彼女が服に合わせているのか、それとも服が彼女に合わせているのか、涼香の服装は涼香のイメージそのものを映し出しているかのように淡く、優しいオーラを出していた。

僕は、静かに彼女の隣に座り、彼女もまた僕の存在に気付き、ゆっくりと本にしおりを挟み、本を閉じた。

「近くの喫茶店行こうか。そこオムライスが美味しいんだよ」
小さい声で囁くように彼女は言った。

「読み途中だったけどいいの？」

負けじと僕も最大限に声のボリュームを下げるようにして囁く。

「平気。ちょっと待ってね」

彼女は静かに席を立ち、ワンピースのしわを取るようにお尻を撫で、小説と手帳をリュックにしまい、背負った。

「準備完了っ」

「うん。行こうかつ」

涼香がお勧めした喫茶店は、図書館前の斜めな道を少し下り、小道に入った所にあった。

外見は少しレトロな感じで、喫茶店の入り口の周りには、小さな向日葵が幾つか謙虚に花を咲かせていた。中に入ると暖かいオレンジ色の蛍光灯をつけたシャンデリア風の照明器具が天井に吊るされており、中世ヨーロッパな感じを漂わせていた。（勝手な僕の想像上だが。）お店は、50くらいであろうダンディズムな店主が一人でやっているらしく、何だか淒い落ち着いた雰囲気を感じていた。恐らく涼香はことうゆう雰囲気が好きで、この喫茶店が気に入ったんだろう。

僕らは自然と奥のテーブルに腰掛け、涼香はメロンソーダ。僕はミルクティーを注文した。コーヒーを飲めないというのを、お互い感じ取ったのか、僕らは顔を合わせてクスクスと笑った。

飲み物が来たので少し飲み、一息ついてから些細な話題を振ってみた。

「そういえば、さっき何の小説読んでたの？」

「んーん。ちょっとした小説家のエッセイ集」

「エッセイか。あんまりエッセイとか読まないなあ。なんだか、

その人のエゴみたいなものに影響されそうです」

「それは私も思ったりするよ。だから人として何か魅力のある人のエッセイしか読まないもの」

「今読んでた本の作者は魅力的な感じの人？」

「この人の書いた小説ってね、大体最後がバッドエンドなの。でも嫌な気分には全くならないの。読み終わって少し虚無感に襲われていると、絶望の中にも希望があるような、本能的に気付かされるような、そんな不思議な気持ちが出てくる。活字だけで人をこんな気持ちにさせる人のエゴって凄い魅力的じゃない？」

「確かにそれは魅力的かもしれないな。他人を良い意味で変える力を持っている人って人間として凄い偉大だと思うもん。少し嫉妬するなあ」

「嫉妬って。真くんは真くんで、十分魅力的だと思うのは…私だけ？」

「あんまり褒められてないからどんな反応すればいいかわからないよ…」

「んぐつつて言えば？ふふっ」

彼女はメロンソーダを飲みながら、返す言葉に困っている僕を興味津々な目で見つめていた。僕は苦笑しながらも「ぐふっ」なんて言っつて、彼女を笑わせてみたりしてみる。

涼香にとって、その作者が魅力的なように、僕にとって涼香は、恐らく現代の国語辞典には載っていないであろう、不思議な感情をもたらししてくれる。そういう面で魅力的な女性だった。

その後も、最近会った他愛も無い話に花を咲かせたり、ある事に対する価値観について議論したりと、お互いの中にある取扱説明書を見せ合いっこするように、僕らは会話を楽しんだ。時計の針が6時を回り、周りにポツポツ座っていた客も、気付いた頃にはすっかりいなくなっていた。涼香はこの後バイトがあるらしく、図書館の前まで一緒に帰る事にした。

「なんだか…凄いいっぱい話したね。」

「うん。涼香の価値観って僕からしてみると凄い新鮮で全然聞いて飽きないよ。」

「飽きてアクビなんかしたら思いっきりイス蹴ってやるんだから！」

「男勝りな性格の女性も今までに会った事無かったからなあ…」

「ん。蹴るよ?」

「…発言を撤回しよう。僕が女々しいだけだ…よね?」

「そうゆう事」

「口で女性には勝てないなあ」

「あら。もしかしたら腕相撲でも勝っちゃうかもよ?あたし強いんだから!」

涼香は突如前に走り出すと、僕の前に立ち、満面の笑みを浮かべ力こぶを見せる仕草を試みた。大人っぽい容姿の反面、子供のよくな事をする。その彼女のギャップも、僕にとっては十分すぎるくらい魅力的だった。

図書館の前に着いて、ソワソワしながら僕が別れの言葉を探していると、涼香は僕の顔を覗き込むように「ねえ真くん。明日は?」と、聞いてきた。

「夕方からバイトだけど…基本いつもと変わらない毎日ですな。」

「ふふ。変に安心した。じゃあ…会えたらまたね?」

「うん。じゃあ」

帰り道、僕ははっきりと確信した。

僕は…彼女に、涼香に恋をしている。

その感情は、一目惚れなどという言葉よりもずっと深く、大きく、苦しいものだった。今までこんな気持ちを味わった事が無かった分、言葉に表すのも難しかった。

（涼香に自分の気持ちをどう伝えたいのだろう。いや…涼香なら、おそらく僕の反応やらで察してくれるはずだ。とにかく今は彼女といっぱい会って、いっぱい話したい。色んな所にいって色んな涼香を見てみたい。それで今は十分だ）

この自分本位な考え方が原因で、結果、彼女を傷つけてしまう事になるうとは、この時点で想像してもみなかった。

8（後書き）

この物語は去年書いたもので、途中で挫折してしまったものです・
・（汗）続き読みたい方は是非感想にて：もしかしたらまだ立ち上がれるかも知れませんw
なので一応これにてという事で：：なにかの参考にでもできるのでしたら是非参考にしてください^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8472l/>

小悪魔スマイル

2010年10月17日07時32分発行